



市史編さんだより

現代に生きる

リデル、ライトの精神

—記念老人ホームの資料調査を終えて—

出席者

猪飼 隆明（近代専門部会専門員）

小笠原嘉祐（リデル・ライト記念老人ホーム理事長）

藤本 桂史（元・市立高校教諭）
司会 坂口 勝彦（現代専門部会専門員）

坂口 昨年からリデル、ライト両女史の顕彰運動が市民の間で大きく広がっています。その足跡を正確に記録することは、熊本市史編纂にとっても、大変重要なことだと思います。ゆかりの資料調査も一段落したところで二人の足跡を振り返り、福祉の在り方とか国際貢献といった問題まで含めて話し合っていただきたいと思います。

リデル選ばれましたが、偉大な功績からすると顕彰はやや遅かっただのではないかと思いますが、猪飼先生はいかがお感じですか。



猪飼 一番大きな役割を果たしているのは戦前です。明治23年、リデルさんが熊本に来て本妙寺の階段にたくさん集まっているハンセン病患者を見て、何とかしなきやと救済事業を始めた。その熱意が予防法を成立させた。姪のライトさんも彼女を手伝つて活躍するわけです。

イト 日本では江戸時代から、ハンセン病は極めて不可解な病気だということで救済の対象になつてない。ところが、ハンセン病は直接手を差し伸べたの

工はリデルであり、同時に手取かります。リデルの伝道と合わせて行われた教済活動は、戦前

日本人の多くの人たちの励ましになった。現在戦後48年ですか。ちゃんと顕彰があつてもよかつたなと思います。

坂口 リデルさんが来熊された明治23年は、ちょうど日本の議会制度がスタートし、近代国家としての枠組みを作り終えた頃です。その頃、女性宣教師として日本に来られ、しかも熊本に骨を埋めるまでハンセン病予防、患者救済に尽力されたのは大変な功績だと思います。そういう人に対して、熊本県人は正しく評価しようという努力を怠つたような感じもします。

藤本 ここにおられる方々も、顕彰はとつに済んだものと思つておられたに違いない。どういう事情で遅くなつたのか、ちょっと理解できません。

坂口 キリスト教の宣教師として仕事上の目的を持つて日本に見えたのでしょうかが、熊本の土になるまで徹底した献身的な努力を、例えば日本人として同時代にやれただろうかと、不思議に思うくらいなんです。

小笠原 リデル、ライトさんのことを思う時、いつも「出会い」と「分かれ合い」ということを考えます。リデルさんは外国に派遣される時、おそらくインドに行きた

編集・発行

熊本市
新熊本市史編纂
委員会

熊本市手取本町1の1

市史編纂室

☎328-2038・2903

目次

▽現代に生きるリデル、ライトの精神	1
▽日誌抄	6
▽山田武甫の読み方について	7
▽熊本の花街（三）	8
▽写真に見るくまもと	
▽編纂委員・専門部会専門員の紹介	12
▽史料調査にご協力いただいた方々	12
▽史料の提供についてお願ひ	12
▽お知らせ	12
▽編集後記	12



いは日本にやつた。しかも、熊本に行けと言う。けれど、リデルさんは熊本に行きたくなかった。それは、前年の22年に熊本で大地震があつたからですね。

だけど、その熊本に来てしまった。そして、二ヵ月後に本妙寺へ花見に行って、そこでたまたま桜の下にたむろする患者さんを見て、これが私の一生の仕事だと思つたわけです。それからの半年間、日本語はほとんどわからぬ状況で、「アーメンの尼が来た」とか、「言葉より食物を持ってこい」とか言われながら、ずっと通い続けるわけです。後で回春病院に入院することになる患者さんたちの所へ。

そこまで彼女を動かしたのは、本当の意味での「出会い」があつたからでしょう。宣教して英語でも教えていればそれで済むのを、自己を捨てて患者救済に打ち込むというのは、そこに真に「出会い」があつたからとしか思えません。そういう「出会い」の真実の姿とは何かと云ふことを、我々は福祉を始める時に、新たな課題として捉えなければいけないのではないかとしよう。

坂口　リデル、ライト両女

史を筆頭に、熊本の近代化の中で外国人女性が教育とか福祉とかいった分野でごく大きな功績を残している歴史的にみて、当時の日本に外国人が様々な形で関わっているのは、熊本だけじゃないわけでしょう。

猪飼　ものすごい数ですね。日本に来たお雇い外国人と通常言つているのは、政府とか地方の行政機関が雇つている人です。そのほとんどは技術者なのですが、宣教師の場合はちょっと性格が違つていて、どこからも直接的な援助、例えば定まつた給料をもらうということはない。その意味でも相当な決意をして来ているんだろうと



座談会 平成5年1月7日

いうことはわかります。経済的にもね。

小笠原　リデルさんの場合、最初から全財産を処分しようなんて露ほども思つていなかつたんじやないでしょか。現実を目の前にして、まさに出会いがあつたから私財を全部投じるという決意をしたんですね。

坂口　大変な決意ですね。藤本先生に伺いたいんです
が、例えばジエーンズとかハーレンとか男性の外国人への光りの当て方からすると、外国人の女性への関心の持たれ方がやや薄いような感じがするんですけども。

藤本　ハーンは五高に来てエリート達に教育を、ジエーンズも社会のトップクラスで活動した。しかし、リデル、ライトは全く社会の底辺に入つて、そこに生涯を入れ込んでいる。そこに違いが出たんじやないです。

それでも、遠い地球の反対側、未開の地までやって来、名譽もお金も全部投げ捨てて、生涯を擲げるといつには半年ぐらい軽井沢に行つて、一生懸命、いわばボランティア基金じやないですけれども、お金の工賃も一杯いる。大隈重信と出会うのもその辺からです。長い時には半年ぐらい軽井沢に行つて、一生懸命、いつ明治40年ですか、予防法が成立する。こういう行動力と面をしている。その付き合いの中から、ハンセン病の予防法も経過的に出でてきたと思うんです。

坂口　体当たりで時の首相あたりに陳情して、ついにして乗り込まれると、どうも断りきれない。

小笠原　もう一つ、日本の皇室に対する親近感というものは、リデルさんが英國の王室に対し非常に尊敬の念を持つていたこととだぶつてゐると思います。いつも飾つていたのはジョージ5世の肖像と光明皇后の絵と、御真影でしたからね。すごい組み合わせですけどね。そういう貴族的な流れの中で、大隈さんを信頼させたのかもしない。これは推測の域を出ないけれども。

猪飼　僕はむしろ、日本に来られて、活動する時期の厳しさの中でそういうものが生まれたんじやないかとう気がしますが。

小笠原　最初はそうかもしれませんね。それで一生懸命考えた末に一(笑い)。

坂口　福田令寿先生の「百年史の証言」を読んでみますと、学生とか公務員とかを集めて英会話教室を開いていたらしい。リデルさんは市民生活へも大変な影響を与

えている感じがするんですけど。
猪飼 積極的に関わるという努力はやはりあつたんでしょう。そうでないと、あそこまで長いこと続けられないと思いますよ。

持ち越された近代史の課題

坂口 リデル、ライト両女史ゆかりの貴重な遺品類、記念館を昨年、小笠原先生の所から市に寄贈されたわけですが、そこに至るいきさつを簡単にご紹介いただけます。



小笠原 また出会いの話が

出ますけど、私個人としてはライトさんと直接的な出会いがあるんです。オーストラリアから帰って来られた後、私はよく覚えてませんけど、抱

つこされてるんです。それだけでなくて、いろんな流れの中で今考えると、私も引き寄せられるが如くりデル、ライトに関わるようになってきました。

福祉の話になりますが、戦後、両女史の記念養老院、

それを引き継いで養護老人ホームという形でやつてきました。

した。そして、地域福祉という時代の中で特別養護老人ホームとかショートステイ、デイサービスセンターを加えて、新しい複合施設を昨年までに作り上げました。

百年続いている施設ですが、いろんな糾余曲折があるし、マイナスの歴史も確かに抱え込んでいます。それでもやはり、あの地に脈々と続いたのはリデル、ライトが本当に全身を捧げてあの地に来たということが支えている。何よりも、二人のお墓があるわけですから。日本流に火葬して、名実共に熊本の土になつて、あそこ



リデル・ライト記念館 旧「ライ茵研究所」大正7年建築

ことが、寄贈の中にある大きな意図なんですね。
坂口 熊本市、市民全体の財産として非常に貴重な記念館になるでしょうね。



猪飼 そうですね。熊本の歴史にはいろんなものがありますが、やはりちょっと異色でしうね。と言うのは、今までの日本の歴史、熊本の近代史の中でも衛生だと病気

の問題を含めた研究というのは弱かつた。我々に持ち越された課題として、歴史の中でちゃんと位置づけること

が必要だと思います。僕はね、この仕事で初めてお伺いした時、びっくりしたんですよ。重要な資料が何げなく

ポイと置いてあるわけです(笑)。ちょっと開けると遺言書の現物が入っていたり。大隈重信の手紙もそこら

辺にあつたりですとか。
坂口 藤本先生、大変膨大な量の遺品類を調査されてご苦労様でした。整理は一段落したんでしょうか。

藤本 文書に関しては、応全部に通し番号を付けて、あれと言えばパツと取れるようになりました。しかしまだ、きちんと箱には入っていないので、猪飼先生が言われたように、それこそ見る人から見ると涙ぐむみたいなものが無造作に置いてあるというところもあります。

坂口 調査されて気づかれた事とかエピソードは?

藤本 今後、記念館が整備されてくると、思いがけぬ寄贈があるかもしれません。今日ちらつと見た手紙に、「記念館ができるのですが、私が持つていても一代限りだから寄贈します」と書かれていました。

小笠原 ありますよ。私のロッカーにもまだライトさんの洋服がぶら下がっている。然るべくきれいになつて、熊本市への寄贈に至つたわけです。ですから、何よりも過去の歴史を、単に歴史の中にはうり込んでしまうとか、過去の追憶というのではなく、我々はあくまで二人の歴史に支えられて出発するんだと宣言したいという

整理されたものを見ていて、秋山禪範先生が手掛けた分だけ無事残ったなという印象があります。この間、小倉のお宅にお伺いしたんですが、お嬢さんが「あそここの物には父の思いがこもっています」と言われました。私はよく知らないけど、整理途中に倒れられ、病室から指揮を執られたそうですね。秋山先生が言わされたのは「お陰で、これからはきちんと保存していただけるらしいですね。これで私も残すことなく、心豊かに天国へ参ります」と。

坂口 政府の要人や皇室から来る手紙、あるいはこつちから出した手紙が残っていますね。その中に、日本語のものがありますが、だれが書かれたんですか。

小笠原 ほとんどが飛松甚吾先生じゃないかな?と思います。飛松先生が書かれた「ミス・ハンナ・リデル」を復刻するんですが、そうした書簡類がかなり下敷きになつていています。それと、今度手に入つた書簡の中には、飛松先生宛のものも結構あるんですよ。清浦奎吾とか徳富猪一郎の手紙とか。

猪銅 何通もあるの?

小笠原 7通ぐらいです。

藤本 青木恵哉氏は沖縄で相当苦労して伝道しながら、毎週一回、リデル宛に報告しているはずですが、一通も残つていません。

坂口 両女史が残したたくさんの資料は、熊本の近代史のみならず、日本の近代史にとって非常に貴重なものが多いと思うんですが、猪銅先生はどういうふうにご覧になりますか。

猪銅 ざつと見たところでは、「ユーカリの実るを待ちて」という本を編纂されるにあたつて、内田守先生が大変よく資料を見ておられる。ただ、リデル、ライト個人など、あるいはハンセン病救済施設に関する研究、日本あるいは熊本という所でハンセン病救済活動がやられていることがどんな意味を持つているかということを

考るために、もう一度実物にあたつてみることを、これからしなきやなんらんと思うんですね。そういう意味では、貴重な資料が随分あるわけで、丹念にそういう書簡を読む必要がありますね。英國との関係もありますから、もう少し広い視野で研究してみるということも、これから大事かなという気がします。

「分かち合い」が福祉の原点

坂口 資料整理もですが、献身的行為といった目に見えないものも含めて、両女史が残したものを見後どう活かしていくかが大変重要だと考えます。これから顕彰活動の展望、あるいは問題点についてご発言いただきたいと思います。

藤本 やはり人の生き方とは

いうことに感動がありますね。

ご本人達は顕彰されるなどと

はおよそ考えもせず、皆が見

捨てた底辺層の所へ入つて生

涯をかけられた。今は誠実と

か真面目とか流行らないらしいが、時代遅れであろうと

何であろうと、この生き方はすごい。

坂口 藤本先生がおつしやった生き方というのは、す

ごく重い意味があるよう感じがします。小笠原先生は

どんなふうに感じられますか。

小笠原 私は残すべき課題とということの中に「分かち

合い」を挙げたい。

坂口 分かち合い?

小笠原 福祉の普遍性みたいなものだと思うんです。

それは国際交流とすることにもつながっていくのかもしれないが、要するに人が会って、生活していく上で

一番印象的なことですが、あそここの構内に昔、教会がありまして、正面がスロープになつてます。今風に言うならノーマライゼーションですね。現在、アクセスとかバリアフリーとかいろいろ言われているが、正面は階段で周りにスロープがあるというのがよくあります。ところが、ここでは正面がスロープになつています。あればまさに、障害を持っている人と共に生きようということを象徴していると思います。本当に「分かち



「降臨教会」
大正13年建築

※入口中央がスロープになっている

足りない部分をお互いに補い合うというごく当たり前のことです。「分かち合い」をいろんなレベルでするといふのは、我々が生きいく上には常に必要なことだと思います。それがリデル、ライトの実践の中に非常に強くあります。それと並んで、もう少し広い視野で研究してみるとあると思っています。

合い」が深化されるならば、ノーマライゼーションといふのは今の時代だけの問題ではなくて、普遍的に存在するんだということを、このスロープは象徴しているのではないでしようか。

もう一つは、ボランティア精神です。戦前、回春病院を維持するために「日々の糧リーグ」というのがあります。例えは、私の誕生日が11月何日としますと、その日の皆さんのお金から出しましよう、みたいなことをやっていたわけです。今風で言うならボランティア。そういうお互いの「分かち合い」精神が、あの中には貫徹されていた感じがするんです。

リデルさんが本当に患者さんと分かち合っていたんだなということが、昭和6年の陸軍大演習の際に山県有朋侍従を迎えた時のエピソードによく現れていると思うんですよ。というのは、山県侍従が天皇の名代として来院する時に、「その日は患者を外に出さないように」と言つてくるわけです。そしたら、リデルさんは「来ていただきなくて結構です」と言つて。当時、天皇の名代を断るなんて大変なことで、不敬極まりないことなわけですね。最終的には、その義に非ずということで、いつもの状態のまま山県侍従が来たらしいけど、その時にリデルさんはどう言つてはいるかというと、「私のこの又とない栄光の日を私の愛する子供たちと迎えたいと思いました。私の子供は皆、紳士淑女であります。決して不敬なことはいたしません」。その後なんですが、「もし私の手で子供たちを軟禁して、私一人で侍従をお迎えした時、私は永久に母親としての誇りと資格を失います」ということも言つているんですね。

母親という言葉を出しているけど、まさにここで自分がやつたら、私の分かち合いの精神は崩れるんだと、いうことで貫かれている。そういう普遍性を持つた福祉というか、人間の生き方みたいなものをもう一度明らかにして、我々のものにしていくというのはすごく重要な

ことだと思つてます。

国際交流でも、単に英国人が日本に来たということじゃなくて、そういうことを越えてもっと普遍的な人と人の出会いがきっとそこであつたはずです。リデルさんは英國の人で、ハンセン病の患者さんは日本人だったけど、しかし出会いとしてはもつと普遍的な、本当の分かち合いがあつたのです。そこらが顕彰事業の中で生かされるといいんじゃないかと思います。

坂口 顕彰活動の一つのポイントがその辺にある点はありますか? 例えば、単純に美化していくことがいいのかどうかといった、足元を見据えた姿勢はあってもいい感じがします。逆に、何か問題点、お気づきになる点はありますか? 例えば、單純に美化していくことがいいのかどうかといった、足元を見据えた姿勢はあってもいい感じがしますけれども。

小笠原 患者さんの遭遇の歴史をどう評価するかが問題だと思いますんで、そのネックにあるいろんなエピソードが今後出てくると思います。そのことによって、逆にその間に登場する方が改めて客観的に評価されるという点では、僕はむしろ勇気を持つてやる必要があると思いますね。

坂口 猪飼先生にお尋ねしますが、市史の編纂作業の中で両女史をどう位置づけ、どのようにクローズアップしていくのか。今なぜリデル、ライトなのかという素朴な捉え方もあるうかと思いますけれども。

猪飼 小笠原先生の話にも関係するが、伝染病についての日本の扱いは、基本的には隔離政策なんですね。外国から入ってきたコレラが猛威を振るうからコレラ、ジフテリア、それから赤痢、腸チフスなども明治10年代に法定伝染病に指定するんだけど、そのやり方も全部隔離。ハンセン病の予防法にしても隔離政策です。

これが恐らく日本の今までのこの種の病気にに対する扱いだつた。だから、エイズにしても結局、差別だとかいう問題になる。つまり、触れないでおこうと。そういう日本の衛生行政だと、卫生の観念だと、かに対しても、若き人々は知つてはいるんで

リデル、ライト両女史は挑ん

だわけです。我々は今、そういう姿勢を学ぶ必要があると思

います。それを、市史編纂の

中でも正しく位置づけること

が大切でしようし、そういう

意味でやはり今もリデル、

ライトは生きていると考えていいんじゃないでしょうか。

坂口 戦後、熊本では黒髪

校問題など非常に重い社会的

問題を経験しました。あのこ

とを覚えている市民もたくさんおいでだと思いますが、果

して両女史がやつてきたことを十分、熊本人は生かして対

応をしてきたのかどうかとい

うことを見、改めて感じます。

猪飼 両女史についてはあまり知らないのが現状でしょ

う。労働者に選ばれたので、この人は何だろうと言う人達も多いと思いますよ。やはり、

ハンセン病の問題も含めて読みやすいものが需要ですね。

顕彰という意味からも、パンフレットとか正しい知識を得られる誰でも読めるようなものを作っていくことが必要で

しょう。

坂口 例えば、宮崎松記先生の生き方とともに、宮崎さんを若い人々は知つてはいるんで

しょうか。

猪飼 その意味でも、二人をクローズアップすることには、一方で周辺の人達も浮かび上がらることにならなくてはいけない。

坂口 前後しますが、小笠原先生、ハンセン病の患者数、世界や国内の状況はどうなんでしょうか?

小笠原 少なくとも日本に関しては、ほぼ新しい発病はなくなり、かつて発病された方が全国の療養所で生活されているのが現状です。ただ、まだ世界にはインドやネパールなどに多くの患者さんが残っています。

坂口 国際交流、あるいは国際貢献が盛んに言われる時に、リデル、ライト両女史は我々に非常に良いお手本を示してくれているように思います。

猪飼 国際化という意味から言えば、病気を世界でくい止めるということを日本は随分やっているんだけど、くい止められない病気もいっぱいあって、国際化というのは病気の国際化である。不幸にも病気になつた人達に対して差別は許されない問題だけれども、現実にはまだ尾を引く課題でしよう。それを撲滅していくのが、徹底した人道主義の力なんじゃないだろうか。

ところで、戦争の時にライトさんは日本に居られなくなつてオーストラリアに行かれる。にも関わらず、70歳を過ぎてから日本にまた戻つてこられたということが、日本にとつては救いだつたと思うんだけど。

藤本 気に掛かるのは、政府が病院をつぶし、ライトさんを無理やり追放する。しかも、ライトさんの背中には傷跡が残つていたという話しがある。もし事実だとすれば、信じ難い。明治以来、両女史がやつてきたその一番最後が、これに報いずに文字通り叩き出しだった。暴力的な権力に加速度がついた時の怖さへの反省が必要です。

坂口 ひどい目に遭わせたという痛恨の思いが熊本人にはあるよう気がしますね。それでも、母国に帰られ

るんじやなくて、日本、しかも熊本だったというのは本当にホッとしますね。

猪飼 一つはリデルさんが骨を埋めた所だということはあるでしょうけれど、やはり患者とのつながりが強いんじゃないでしょうか。

藤本 オーストラリアからの手紙が残っていますが、日本に帰りたい、日本に帰りたいという文面がずっとつづってある。

小笠原 ライトさんに大きな意味があるのは、やはり日本に帰つてもらつたということだと思います。そ

うでなかつたら、あの施設なんて無かつた。もちろん、リデルさんを引き継いだ意義もある。それと共に、やはりライトさんに戦後帰つてきていただきたこと。実際、そこで何か事業をしたわけではなく、未感染の子供たちと一緒に生活したという事実しか残つていませんが、それでも、そこにいたという正に存在、それがすごく重要なじやなかつたかなと僕は思っています。

坂口 この4月には両女史の顕彰会が正式に発足しますし、熊本市婦人会館で多彩な顕彰活動事業が予定されています。これを機に、日本人、あるいは私達の生き方とか、ボランティアの問題とか、また国際貢献とは何だろうかといったことを、一人一人が考えるよすぎになればと思います。本日は誠にありがとうございました。

平成四年

第十五回民俗・文化財専門部会(担当部門の項目立について)

第二十四回部会長会議(差別問題について)

現代史料調査原稿執筆分担等について)

原始・古代古墳測量調査(福井山古墳)

第十七回中世専門部会

原始・古代古墳測量調査(城山古墳・一の塚・二の塚・三の塚)

近世史料調査(収集史料の検索)

現代史料調査(地図打合せ)

近代史料調査(新聞史料記事採択)

自然史料調査(植物関係打合せ)

中世史料調査(米田家文書)

(弥富家文書)

近世史料調査(収集史料の検索)

(所蔵相良家文書)

中世史料出張調査(慶應義塾大学・田情報セントラル所蔵相良家文書)

原始・古代古墳測量調査(宇留毛・羽山・千金甲古墳)

第十三回自然専門部会(調査項目の調整)

現代史料調査(地図関係・新聞史料項目索引)

自然史料調査(植物関係打合せ)

近世史料出張調査(東京・国文学資料館、永青文庫)





山田武甫
明治26年(1893)
天保2年(1831)後
武甫は、元々姓は山田で、この年改姓した。
この年、『大日本百科事典』に採用された。

山田武甫の読み方にについて

近代専門部会 花立三郎

山田武甫の名前「武甫」をなんと読むか、長いこと気がかかっていた。もう何年前のことであるか、すっかり忘れてしまつたが、乙益重隆氏に「タケトシ」との読み方を教えられた。そのとき、氏は、これはたしかに信用できる人から聞いたので、まちがいないと思う、と念をおされた。以来、私はそれを受けついで、「タケトシ」という読み方を使ってきた。

漢和辞典によると、「甫」は、音は「ホ」、訓は「はじめ」と読む。仕事の「はじめ」の意に用い、また男子の美称にも用いるそうである。この男子の美称に用いられるところが喜ばれて、これも男子の美称ともいいくべき「武」と結びついで、「武甫」という見事な名前となつたのである。「甫」の人名読みには、「カミ」「スケ」などの読み方とともに、「トシ」という読み方がちゃんとあるので、「タケトシ」との読み方には異存があるはずはない。昭和五十七年(1982)発行の『熊本県大百科事典』(熊本日日新聞社刊)にも、この「タケトシ」の読み方が採用された。

この「タケトシ」の読み方は、それより早く「大人名事典」(平凡社、昭和二十九年刊)や「日本歴史大辞典」(河出書房新社、昭和三十四年刊)にも採用されていた。この権威ある両辞典において、ひとしく「タケトシ」との読み方が採用されていることで、後はすでに確定されていたことになる。私はこの両辞典に

おける読み方を勉強にも知らずに、乙益氏に教えられたまま「タケトシ」の読み方にしたがつていて。しかし、その正確な根拠については乙益氏に確認することしないまま、氏は、昨年黄泉の客となられた。

ところが、平成四年に『季刊日本思想史』第三七号(日本思想史懇話会編集、へりかん社刊)に「山田武甫—熊本美学派の人びと—」を寄稿するために、戦前刊行の田口卯吉『大日本人名辞書』(明治十九年初版、昭和十二年新訂一版)をひもといたら「タケスケ」とあつた。「甫」が「スケ」と呼び名されるることは前述したおりなので、「タケスケ」とはまさしく読めるわけである。それに田口卯吉という大学者の編集ではあり、しかも明治十九年刊行というなら、まだ山田が生きている時のものである。

あるいは、この読み方こそ正しいものではないか、「タケトシ」という読み方にに対する私の確信はにわかにゆらいできた。乙益氏にその根拠を聞いておけばよかつたと悔んで後祭であつた。『日本思想史』への寄稿論文では、「タケトシ」の読み方を探ることをわかつておいたが、私の不安と疑念はそれ以来つづいた。たしかな資料が必要であった。

なんの手掛りもないまま平成四年二月に、一木和世氏から、こういうものが見つかりました、といつて一片のコピーを渡された。それは、山田武甫、田中賢道の連名で、嘉悦氏房、池松豊記の両名への電文のコピーであつた。御馬下の角小屋に所蔵されている文書のなかにあつたものだという。これこそ私が探し求めいたものであり、「一本木の協力に感謝するほかはないが、昨年の七月一二日近代専門部会で現地調査をしたさい、原物を見ることができた。

この電文の発信年月日は、八月六日の月日ははつきりしていて疑う余地はないのだが、年がはつきりしない。「明治三年」となつていて、空白のところがはつきりしない。明治三年も、十三年も史実からいつて適當で

庫、岡崎家

中世城(小山城)調査打合せ

原始・古代古墳測量調査(花園羽山古墳)

絵図・地図編合同専門部会(収録史料の最終決定と目次構成)

第二十五回部会長会議(平成四年度刊行関連事務について)

中世小山城調査(伐採作業・測量調査)

自然史料調査(植物関係調査打合せ)

近世史料調査(収録絵図写植校正)

中世史料調査(収載史料の検討)

文書館等史料保存公開施設他都市調査(京都市歴史資料館、大阪市立中央図書館、尼崎市立地域研究史料館)

第二十一回近代専門部会(平成四年度事業計画)

第二十二回現代専門部会(平成四年度事業計画)

市史編纂室発足(企画室より総務局総務部へ組織替え)

中世史料調査(収載史料の検討)

中世史料調査(史料検索)

民俗史料調査(聞き取り調査報告)

中世史料調査(史料検索)

現代史料調査(新聞史料日次の調整)

中世史料調査(史料検索)

第十六回部会長会議(平成三年度事業経過、平成四年度事業計画、発刊の基本的な考え方及び印刷仕様について)

現代史料調査(新聞史料日次の調整)

近代史料調査(新聞史料記事探査)

中世史料調査(史料検索)

絵図・地図編合同専門部会(原稿提出について)

第十回新熊本市史編纂委員会(平成三年度事業報告、平成四年度事業実施計画)



電報(御馬下の角小屋藏)

それでも不安はある。福田令寿氏は、ほんとうは「ヨシノブ」というらしいが、一般に「レイジュ」と呼びならされているので、私も「レイジュ」で通しています、と御本人から聞いたことがある。山田もこの例かも知れない。しかし、本人が「アホ」としている以上は、この読み方を最も正しいものと受けとつてよいだろうと思う。

そういえば、徳富蘇峰の「蘇峰自伝」では、「貫して「アホ」の振り仮名がつけられている。山田を尊敬し、非常に親しかった蘇峰がそう振り仮名しているのだから、間違いはないことだろうと思う。たまたま最近山田の遺族の方と連絡が取れ、この点をたしかめたところ、「山田家の子孫は『ぶほ』と呼んでいる」ということであった。

この電文でありがたいことは、山田の姓名が片仮名で書いてあることである。それは、「ヤマダアホ」とある。これで「武甫」とは、そのまま音で読んで「アホ」といつていたことがはつきりしたのである。山田本人は、みずからを「アホ」と称していたわけである。

それでも不安はある。それは、「ヤマダアホ」とある。ここで「武甫」とは、そのまま音で読んで「アホ」といつていたことがはつきりしたのである。山田本人は、みずからを「アホ」と称していたわけである。

明治十年の西南戦争で、京町の花街は全焼した。四月十五日に熊本城の包囲が解けると城下町の内外は北から南棟が急造され、そこにはオニヤク・大刀魚の煮付・肥前の鬼殺しなどを商う荷先業者が駆けめぐらしく、その外にもあります。とあるのは何だろ? と新聞が余詰を残しているのは、勿論これら重夫を相手として春を鬻ぐ私娼の斡旋であろう。

勿論この時期に、遊廓各楼の中には戦闘地域を避けて、市街周辺の薩軍占拠地域に仮屋を設けて営業を再開するものも出来てきた。例えば東雲楼は細工五丁目に寄留して営業しており、迎町にも浜田屋が寄留して営業していることがわかっている。それらは熊本城の包囲中は薩軍のための、包囲開放後は政府軍のために、なくしてはならない必要悪であったのである。熊本城包囲中は県の威信は全く失われ、それ以前に発せられた県達は全く有名無実となり、仮設の妓楼は公然たる亮春宿として存在した。熊本城開放と同時に征討軍とともに南下した熊本県仮県令の権令心得石井省一郎は職務を解かれ、籠城中の権令富岡敬明が再び全県を統轄することになった。しかし六月までは県下はなお戦場であり、そこで最高権力者は言わざとされた軍そのものであった。

当時、芸娼妓は「ノスカイ」と綽名されていたが、これは当地の「ノサン」或いは「ノスコツジヤニヤア」と

熊本の花街 (二二)

民俗・文化財専門部会 鈴木喬

第二十二回現代専門部会(平成四年度事業実施計画、新聞史料写真の選定)

近代史料調査(新聞史料記事探査)

第十九回近世専門部会(年間調査日程の決定)

原始・古代出張調査(佐賀市埋蔵文化財サポートシステム)

市史編纂事業他都市調査(福井市史編纂室)

現代史料調査(現代史料編の編集方針・史料収集方法について)

現代史料調査(次案の検討)

第二十二回近代専門部会(記事探査の基本方針検討)

近世史料調査(収集史料の検索)

第十八回中世専門部会(編集概要の打合せ)

都城市史編纂室訪問

第二十回近世専門部会(収集史料の取扱いについて)

現代史料調査(新聞史料編の編集について)

中世史料調査(無年号文書の年代比定)

近代史料調査(新聞史料記事探査)

中世史料調査(収集史料の検討)

近代史料調査(新聞史料記事探査)

中世史料調査(収集史料の検討)

第十七回民俗・文化財専門部会(聞き取り調査報告等について)

第二十三回現代専門部会(史料調査進捗状況について)

近世史料調査(収載予定史料検索)

中世史料調査(無年号文書の年代比定)

近代史料調査(御馬下の角小屋)

近世史料調査(収載予定史料検索)

近代史料調査(史料編の章立てについて)

第二十三回近代専門部会(永青文庫目録検索)

近世史料調査(東京防衛研究所陸海軍史料)

近代史料調査(永青文庫所蔵文書調査・熊本大学)

8 · 4 · 6	7 · 31	7 · 29	7 · 28	7 · 22	7 · 21	7 · 20	7 · 18	7 · 18	7 · 16	7 · 11	7 · 10	6 · 28	6 · 25	6 · 21	6 · 13 · 14	6 · 11	5 · 28	5 · 29	5 · 27	5 · 21	5 · 14	5 · 13
-----------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	-------------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------



出来上ったばかりの二本木遊廓街。左の門が東雲樓の入口。
家の前にはガス燈がみえる。右の家の看板は「松喜亭」。

—富重写真館提供—

いう方言、共通語で言えば「処置なし、困ったもの」から出ているようである。但し穿った説もあり、それらは昭和五十年三月と六月の「日本談義」を参照されたい。その「ノスカイ」は熊本城開放になると「エビス」と呼ばれるようになる。「エビス」は勿論七福神の一人である恵比須であるが、この恵比須は小脇に鯛を抱えており、これが娼妓達の軍隊という隊を抱えていることに通ずるというところからの語呂合せである。

さて話は戻って薩軍が四月末に保田窪・京塚の再決戦にも敗れて東の山中に去ると、各楼主達や地元戸長の間で京町への遊廓再建が協議されたが、これまでの地元民との間の感情のこじれが強く、現地での存続折衝は行き難んだ。そこで新たに迎町と二本木の両所を限って遊廓設置の許可を願う者が出てきた。県はこの申請を受けて、当

時一面の畠地であった二本木に遊廓の設置を許可するとともに七月十日までに彼地に引移るように指示した。この頃になると警察の体制も整い、売春の摘発が頻りに行われているが、当時の处罚者を見ると、北岡・板屋町・阿弥陀寺町・新桶屋町・蔚山町・坪井立田口・本庄村・本山村など広い地域にわたって散在していたことがわかる。なおこの頃、軍の主力は八代に集結していたため、八代糸屋町の遊廓街は大繁昌で、芸娼妓は三百名を下らず、県下第一等と称せられている。

二本木遊廓の建設については、八月十三日浜田屋が新築のための地突を行い、それに抱え芸娼妓が華やかな装いで参加している。十一月になると文明楼、十二月には七福亭・清川亭・八百正・新玉楼などの名が見え、この月には旧京町の妓楼は全部二本木に移ったと記されている。たまたま蓮台寺渡しを橋にしたいと協議をはじめた。これが後の白川橋(思案橋)のおこりである。一方遊廓に去られた京町は一時に寂れ、生計にも差支えるというので遊廓の帰住を出願するグループもあつたが、勿論聞届けられる筈もなかつた。暮の二十五日、二本木新玉楼で美女達の手で餅搗が行われたときの歌「新玉の年を迎ふる餅搗や弁財天も大黒となる」。

10 20	10 17	10 16	10 8	10 7	10 5	10 1	9 29	9 28	9 26	9 25	9 19	9 15	9 14	8 27	8 20	8 19	8 18	8 10	8 7	8 6
----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	--------	--------

- 近代史料調査(史料編纂について)
第二十七回部会議(市史印刷発注業者凸版印刷との打合せ)
近代史料調査(新聞史料記事採扱)
民俗史料調査(現地聞き取り報告分析)
現代専門部会(印刷業者との入稿打合せ)
近世史料調査(永青文庫所蔵文書調査・熊本大学中世専門部会(印刷業者との入稿打合せ)
近代史料調査(新聞史料記事採扱)
市史編纂委員他都市観察名古屋市政資料館、徳川美術館(関ヶ原資料館)
現代史料調査(組見本検討)
近代史料調査(新聞史料記事採扱)
近世史料調査(永青文庫所蔵文書調査・熊本大学近代史料調査(新聞史料記事採扱)
近代史料調査(新聞史料記事採扱)
絵図・地図・編合同専門部会(刊行について印刷業者と打合せ)
民俗史料調査(藤崎八幡宮例大祭実態調査)
近代史料調査(リデル・ライト記念老人ホーム)
近代史料調査(新聞史料記事採扱)
第十六回民俗・文化財専門部会(聞き取り調査報告)
現代史料調査(校正について・本文削減について)
近代史料調査(藤崎八幡宮例大祭実態調査)
近代史料調査(新立図書館蔵郷村(写真撮影))
第十二回近世専門部会(下期事業計画)
近代史料調査(リデル・ライト記念老人ホーム現地調査開始)
第十八回部会長会議(市史発刊其通仕様について)
近代史料調査(校正方針の検討)
近世史料調査(東京都釣本家、藤沢市圭室家)
民俗史料調査(永青文庫所蔵文書調査・熊本大学)
近代史料調査(リデル・ライト記念老人ホーム史)

くまもと

解説 鈴木喬

なつかしの辛島町ロータリー

右側の三階建はかつての勧業館、隣の森は花畠公園、左の三階建は熊本地方専売局舎で、その先に煙草工場が続き、その奥に熊本市の旧公会堂の正面玄関が姿を見せている。

中央台上的銅像は日清戦役の記念碑で、昭和18年の金属回収で応召され、再び還らなかった。そのあとについ先頃まで加藤清正の銅像が坐っていたことは記憶に新しい。昭和7~8年頃このロータリーは市営バスの乗降センターであった。



今はなき長六橋

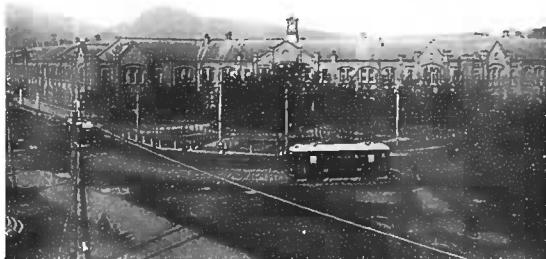
平成4年に新設された長六橋の旧橋の雄姿である。白川右岸の河原町側からの景観で、橋上を走るのは、これも今はなき川尻電車である。この橋は加藤清正の時代に架けられた白川唯一の橋で、もともと木橋であったが、昭和2年はじめて鋼鉄製のアーチ橋として完成了した。同28年の大水害にも流失せず、熊本市と南の街道をつなぐ交通路として大活躍した。橋梁上の柱組に「長六橋」のネームが入っている。道行く女性のパラソル姿に昭和初期を感じる。

11 · 30	11 · 29	11 · 28	11 · 27	11 · 26	11 · 22	11 · 22	11 · 21	11 · 21	11 · 19	11 · 17	11 · 16	11 · 15	11 · 14	11 · 12	11 · 11	11 · 11	10 · 6	10 · 5	10 · 31	10 · 31	10 · 29	10 · 29	10 · 28	10 · 22	10 · 22
---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	--------------	--------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------

- 料写真撮影)
中世史料調査(集合校正)
近代史料調査(新聞史料記事探査)
第十九回原始・古代専門部会各分野調査項目の検討)
中世史料調査(集合校正)
第十五回自然専門部会(平成四年度決算・新年度計画)
第二十四回近代専門部会(平成五年度事業計画)
第二十九回部長会議(編纂委員会の議題、編集方針共通事項について)
近代聞き取り調査(舒文堂)
中世史料調査(集合校正)
近世史料出張調査(徳川美術館、名古屋市秀吉・清正顕彰館、同博物館、法華寺)
近代史料調査(新聞史料記事探査)
第三十回部長会議(編集方針共通事項)
人権について)
近世史料調査(永青文庫所蔵文書調査・熊本大学)
中世史料調査(集合校正)
第十八回民俗・文化財専門部会(聞き取り調査報告)
近世史料調査(収集史料の検索)
現代史料調査(差別用語の検討)
第三十回部長会議(編集方針共通事項)
人権について)
近世史料調査(永青文庫所蔵文書調査・熊本大学)
中世史料調査(集合校正)
第十八回民俗・文化財専門部会(聞き取り調査報告)
近世史料調査(集合校正)
自然植物野外調査
中世史料調査(集合校正)
近世史料調査(新規史料採択記事見直し)
現代史料調査(集合校正)
近世史料調査(新規史料採択記事見直し)
第十一回新熊本市史編纂委員会(編集方針共通事項・記述と人権、各専門部会経過報告)
近代史料調査(新聞史料採択記事見直し)
现代史料調査(集合校正)
近世史料調査(新規史料の検索)
第十五回専門部会(新聞史料採択記事見直し)

写真にみる

熊本市電開通の頃



熊本地方専売局煙草工場の全景である。明治44年完成の広大な赤煉瓦の建物には、合せて1500人が働いていたが、昭和20年7月1日の空襲で焼失した。跡地は昭和42年まで熊本県庁他の官庁用地となっていたが、現在では熊本岩田屋と交通センターに変身している。前を走っているのは大正13年に開通した熊本市電第一期線で、現市民会館前から坪井川沿いに走り市役所前に出ていたが、昭和3年に今の路線に变成了。後に頭をのぞかせているのは荒尾山である。

鈴蘭灯の上通り

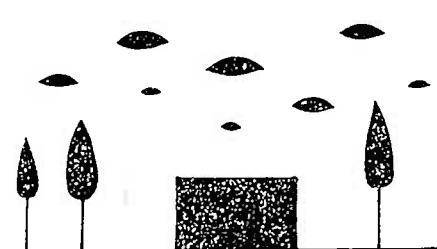
昭和6～7年頃の上通りである。当時は熊本第一の繁華街で、東京人が銀座通りを散歩することを「銀ブラ」と言ったのに似せて、熊本人は「上通りブラ」と称して散歩を楽しんだ。通りでも鈴蘭灯を設置して市民の要望に答えた。

通りの右側に眼鏡の大宝堂があり、左には文林堂支店が見える。文林堂の奥の鈴蘭灯の先に屋根瓦の見えるのが長崎次郎書店である。夏の日射しの下、大人は白紗、済々費の学生は夏の霜降り制服に下駄で闊歩している。



12 · 26	12 · 25	12 · 20	12 · 17	12 · 15	12 · 10	12 · 10	12 · 9	12 · 5	12 · 5	12 · 4	12 · 3	12 · 3

- 中世史料調査(集合校正)
- 近代史料調査(藤崎富文書)
- 第二十回原始・古代専門部会(考古資料編の構成について)
- 現代史料調査(集合校正)
- 中世史料調査(集合校正)
- 近世史料出張調査(天理大学附属天理図書館、大阪城天守閣、神戸市志水家)
- 第十六回自然専門部会(動物・植物実態調査報告)
- 中世史料調査(集合校正)
- 現代史料調査(集合校正)
- 近代(新聞史料採掘記事見直し)
- 現代(集合校正)
- 自然植物野外調査
- 第十五回現代専門部会(集合校正・差別用語の再検討)
- 第十九回中世専門部会(集合校正と口絵の検討)



新熊本市史編纂委員の紹介（敬称略）

平成四年十月十二日付

田邊哲夫（熊本大学非常勤講師）
原始・古代専門部会長

専門部会専門員の紹介（敬称略）

平成四年四月一日付

近世専門部会

川口恭子（永青文庫史料専門員）
瀬戸致誠（鹿本高校教諭）
谷川憲介（元県立図書館副館長）
山中進（熊本大学教授）

お知らせ

●史料編 第一回発刊
新熊本市史 第一回発刊
昭和二十年八月十五日から平成二年一月までの麾大な新聞記事の中から厳選した千五百を越える項目を収録。

●別編 第一巻「絵図・地図」
三百点を越える絵図・地図を収録。

国絵図、熊本府、城下武家屋敷、城下町、肥後国郡村図、市街図（明治～平成、友好姉妹都市市街図等）。

史料調査にご協力いただいた方々

（自 平成四年一月至十二月）

（敬称略）

米田実（龍田町）、安藤正憲（花園七丁目）、今互元則（健軍本町）、大久保圭一郎（稗田町）、柏木明（坪井一丁目）、横山源次（益城町）、森下功（花園七丁目）、松本寿三郎（花園七丁目）、坂田幸之助（玉東町）、岡崎秀生（世田谷区）、圭室文雄（藤沢市）、釤本春良（日黒区）、志水清矩（神戸市）、長野健彰（大江四丁目）、前田明節（新町三丁目）、安達裕之（東京大学）、後藤章・晶子（賀志野市）、河島又生（上通町）、安田充（稗田町）

藤崎八幡宮、医育会館、財徳川黎明会徳川美術館、名古屋市秀吉・清正顕彰会、名古屋市立博物館、法華寺、天理大学付属天理図書館、大阪城天守閣、リデル・ライト記念老人ホーム、防衛研究所、県立図書館、県文化課、熊日情報文化センター、ハイデルベルク市、サンアントニオ市、市医師会、九州電力㈱、国土地理院、国土庁、上熊本駅、全専売、熊本大学付属図書館、共同通信社、陸上自衛隊第八師団、市立図書館、御馬下の角小屋、国際交流室、市教育センター、新熊本振興室、統計課、文書課、衛生部総務課、市文化課

編集後記

問い合わせ・連絡先 熊本市市史編纂室
(電話三二八一一〇三八)

のは、すべて史料となります。町や村、寺社に伝えられたもの、個人の家に伝えられたもの——手記、日記、手紙、写真、地図など、手書き、印刷物、体裁は問いません。情報をお寄せください。

復元された熊本城の長堀が春の光に美しく映えています。

戸外はすっかり暖かくなりましたが、市史編纂の室内は第一回の発刊を控え、厳しい空気が張りつめています。発刊を控えた部会では、毎日遅くまで読み合せ、校正と発刊に向けての作業に余念がありません。

近代専門部会では、昨年10月「リデル・ライト記念老人ホーム」の史料を調査しました。

そこで、調査をされた先生方に当時の時代状況の中で、熊本という地域において、外国の女性による献身的なハンセン病救済活動がどのような意味を持っていたのか、又、何故こうした活動が可能であったのかを両女史の今日的意义も含めて話していただきました。

「市史編纂たより」第6号が事務局の事情で大変遅れましたことをお詫び申し上げます。
(事務局)

市史の編さんにおいては、文書・記録、遺物・遺跡、伝承的習俗など有形無形の史料を收集することが、大切なる仕事となります。

地域における人々の生活が、その地域社会の歴史であるように、郷土の先人の生きかたを知る手掛りとなるもの